

Muriel Spark と Exile

— “Gentile Jewess” をめぐって —

“I Am What I Am” – Muriel Spark as “Gentile Jewess”

沢田 知香子

Chikako SAWADA

Muriel Spark と Exile

— “Gentile Jewess” をめぐって —

“I Am What I Am” – Muriel Spark as “Gentile Jewess”

沢田 知香子

Chikako SAWADA

1 “Gentile Jewess” —非ユダヤのユダヤ人

They sometimes say I’m a Catholic writer. I’m half Jew so that makes me a Jewish writer. But I feel like a Scottish writer. (*Sunday Times* 1)

2001年、*Sunday Times* 紙のインタビューにおいて、Dame Muriel Spark はこのように語っている。ほかのさまざまなことについてと同様、自身のアイデンティティについても、作家に迷いはないようである。

このインタビュー当時スパークは83歳、紙面に載った大きな写真では、知的な眼差しとともにトレードマークの赤みがかかった金褐色の髪もまだ健在で、その外見は、若い頃と変わらずユダヤ系というよりはいかにもスコットランド人らしい。ユダヤ人の父 Bernard Camberg とイングランド人の母 Sarah (née Uezzell) の間に生まれた “half Jew” であるスパークの、人目を欺くその外見にまつわる重要なエピソードは自伝 *Curriculum Vitae* (1991) で作家本人が語って以降、しばしば言及されてきたものである。1937年、18歳で結婚のため南ローデシア (現・ジンバブエ) に渡ったスパークは、世界が第二次大戦へ突入する頃、彼女の人生の暗黒期を過ごしていた (自伝の語りはいくまでも淡々として、そこに悲壮感はない)。結婚後まもなく、精神のバランスを崩して暴力的になった夫の元を去り、産まれたばかりの息子 Robin を連れ、故国へ戻る方法を探しながら暮らしていた。その地の英国国教会派修道院の附属学校で教える仕事に就こうと面接に行った時のことである。そこで出会ったのは反ユダヤ主義の修道院長 (“Mother Superior”) で、スパークは “She [Mother Superior] loves your complexion and your golden hair” (CV 134) と友人から聞かされ、二度目の面談で自分はユダヤ人であると告げる。

I didn’t say part-Jew or any other sort of Jew. I just said, “Of course, I’m a Jew.” (CV 134)

しかし、スパークは、後にひとり息子のロビンが、このときの自分とは違う意味で祖母 (スパークの母) を “half Jew” でも “gentile Jewess” でもなく “full Jew” (*Sunday Times* 1) だと主張することになるとは思っていなかったはずである。祖母の思い出と母系の繋がりを反映した短編 “The Gentile Jewesses” のタイトルに倣い、自身は三代目の “gentile Jewess” であると明言するスパークの立場と、正統派ユダヤ教信者となったロビンの間の確執はスキャンダルとして取り上げられ、親子は和解することなく、2006年にスパークが生涯を閉じ、今年2016年ロビンも亡くなった。

スパークにとって、ユダヤ系としてのルーツに関わる息子との対立は、自身の “exile” —故国か

ら離れて送る人生—の苦々しいリマインダーとなることもあっただろう。ここでは、その“exile”の意味についてあらためて考えてみる。¹

2 Wandering Jew?—20世紀の「さまよえるユダヤ人」

スパークにとっての“exile”の意味を問うことは、当然ながら作家のアイデンティティの問題と深く関わってくるが、そのアイデンティティについては、いまだに固定されたナラティブへ収斂させようとする向きがある。それは、もちろんカトリック改宗者としてのスパーク、作家がデビューした当時に Frank Kermode が確立した「神のような作家」のイメージを元に織りあげられたスパーク神話というナラティブである。*The Edinburgh Companion to Muriel Spark* (2010) に収録された Gerard Carruthers の“Muriel Spark as Catholic Novelist”は、近年、スパークの“undervalued Scottish, Jewish, and gendered identities” (74) が見直され、強調されてきているとするが、それが英文学におけるこの作家のマッピング—あるいはその困難さ—に影響を与えている様子はあまりない。いずれにしろ、結局のところ、カラザーズも Bryan Cheyette のコメントを引き合いに出し、“Spark resists ‘classification’ or essentialism in identity as we see in her very witty short story title ‘The Gentile Jewesses,’ which simultaneously asserts and undermines its narrator’s Jewish identity” (Carruthers 76-77) と述べるが、この前半部分については今さら言うまでもなく、異論を唱える者もないだろう。ここで注目しておきたいのは、後で取り上げるシェイエットの論考にも見られるように、作家のアイデンティティに関わっていつも言及される“gentile Jewess”というフレーズは、得てして、そのまま二元論的な議論に終始しがちだということである。そして、同じく必ず参照されるスパークによる『ヨブ記』の考察、“The Mystery of Job’s Suffering” (1955) をもとに、人間のロジックでは理解できない矛盾を包含する神の存在とその全知の視点を常に喚起するカトリック作家、というスパーク神話に回帰するのである。実際、カラザーズはこのように結論する。

Muriel Spark’s practice as a Catholic novelist is to warn us against too readily judging the moral status of others. Her characters are sometimes presumptuous in their belief that they can read the moral nature of others, or that their constructed narratives of their own and other people’s lives are properly definitive. . . . Ultimately, her Catholic practice is to acknowledge an omnipotent God, sometimes mimicked in the fabric of her novels by the narratorial or authorial character, whose implied perspective is supposed to overarch all human perspective. (Carruthers 83)

カラザーズがこの論考の冒頭で、2002年の *Theorizing Muriel Spark: Gender, Race, Deconstruction* において編者の Martin McQuillan が提示するスパークのカトリシズムに“the evacuation of Spark’s religious centre and an insistence on common, secular (especially ‘Western’), human experience” (Carruthers 74) を見だし、不満を表明していることを考えれば、特に新味のないこの結論は驚くにあたらないかもしれない。

ブライアン・シェイエットは、カラザーズ同様、スパークの“religious centre”を重視するが、“gentile”としてより“Jewess”としてのスパークを論じ続けている。Hannah Arendt、Frantz Fanon から始め、スパーク、Philip Roth、Salman Rushdie を論じ、Zadie Smith まで取りあげる彼の大部の著書 *Diasporas of the Mind: Jewish and Postcolonial Writing and the Nightmare of History* (2013) は、現実を経験されてきたユダヤ民族の歴史と、その民族と歴史をめぐる第二次大戦後のディスコースについての考察の試みであることが前書きで述べられている。

... there is a recognition that a sense of a new beginning at the end of the Second World War took very different forms after the death camps and at the dawn of decolonization. There are, in short, two very different narratives of cosmopolitanism that arose at this time. For Frantz Fanon, one narrative of cosmopolitanism was part of his vision of emergent transnational and postracial identities and cultures after colonialism. But, from a post-Holocaust perspective, as Arendt makes clear, a competing narrative of cosmopolitanism was largely associated with the destruction of the European Jewish diaspora embodied in the figure of the free-floating *luftmensch* (a vagrant or rootless cosmopolitan) who haunts all of the writers in this book ... (Cheyette, 2013, xiii-xiv)

ポストコロニアル時代のコスモポリタニズムと結びつき、もとは東欧のユダヤ人を指す“air-people”の意だという“*luftmensch*”としてユダヤ人が特徴づけられ、語られるとき、単なる“metaphor”へ還元されてしまう危険性に気づきつつ、スパークら“*imagined diasporas*”即ち“*diasporas of the mind*” (xii-xiii)の“*imaginative works*” (xiv)に、その限界を見るよりは可能性を探ろうとするのがシェイエットの目的である。これ自体は大変興味深いテーマであるし、スパークに関して言えば、第二次大戦を経験した後のコスモポリタニズムを効果的に含意できる“*luftmensch*”は“*exile*”よりもふさわしい呼び名となりえる。この点については、まず、スパークを語る重要なキーワードとなってきた“*exile*”という語を作家自身の言葉と視点で少し振り返っておかなければならない。

1962年、*New Statesman* に掲載されたエッセイで、スパークは自身を“*exile*”と呼んだ。

Edinburgh is the place that I, a constitutional exile, am essentially exiled from. I spent the first 18 years of my life, during the Twenties and Thirties, there. It was Edinburgh that bred within me the conditions of exile; and what have I been doing since then but moving from exile into exile? It has ceased to be a fate, it has become a calling. (Edinburgh-born 21)

これが発表されたのはスパークの父の死から数ヶ月後のことで、彼女は冒頭でそのことに触れ、故郷への想いは“*my love for my father*”と“*the exiled sensation of occupying a hotel room which was really meant for strangers*” (Edinburgh-born 21)と繋がっていると語る。2009年のMartin Stannardによる伝記も、母や息子と離れ、スパークがホテルで独りエディンバラの街を見下ろしているこの場面から始まり、彼女にとっての父の存在について“*all the positive qualities of 'home' centred on her father*” (Stannard 3)と説明する。何度となく引用されてきた“Edinburgh-born”からの抜粋部における“*exile*”についての作家の言葉は伝記でも引用されており、スタナードは“*This was not a lament*” (Stannard 2)と言う。しかし、ここには、常に自分の味方であった愛する父を亡くした娘の哀悼と悲嘆の気持ちがこもっている。スタナードが強調したいのは、決して自己憐憫に陥ったりすることのない知的でタフな作家であり、それ自体は本来の作家の姿と矛盾するものではない。それでも、彼自身が描いているこのときのスパークは、より率直、より無防備で、繰り返される“*exile*”の語には“*home*”を喪失した者の悲しみが響いている。そこにはスパークらしくない感傷さえ垣間見えるのではないだろうか。

親の死というきわめて重大な喪失の時にあって自らを“*exile*”と称したスパークだったが、このときの言葉が頻繁に引用され、独り歩きするようになるにつれ、“*It has ceased to be a fate, it has become a calling*”と言うだけでは本意が伝わらないと感じはじめたに違いない。この後、スパークは、“*exile*”の定義に照らしあわせれば、厳密に言って自分は“*exile*”ではない、と強調するようになる。1985年のSarah Frankelとのインタビューでは“*I said it ceases to be a fate; it becomes a calling. And I don't know if you can really call me an exile, since exile means that you've been sent away*” (*Partisan Review* 448)と述べ、この話題に関して幾分の拘りを見せている。さらには、スパークの長年のアシスタントであった Penelope

Jardine が、作家の死後に編集出版したエッセイ集 *The Golden Fleece* (2014) において、その前書きで同じ主張を繰り返す念の入れようである。スパークの “exiledom” が作家のコンディションとして捉えられることについては、“exile” であることが “calling” であるという言葉や彼女の小説からも明らかだろう。² ただ、1985年のインタビュー時のスパークは、より実際のな地理的側面や歴史的側面において次のようにも説明している。³

I have a European background anyway, on the Jewish side of my family—and being away from home is nothing alien to Jews, who moved around all their lives. So I don’t feel outside of anything; I don’t feel disoriented. I think if I went to Africa, or South America, or Australia, I might feel disoriented, more than in Italy or France. But today, with quick travel, television, all the things we know about each other—I don’t think you can compare the traveller of the past with the writer today. . . . As I say, I’m not an exile so much as a traveller. (*Partisan Review* 448-49)

スパークが “exile” というより “traveller” であるとして呈示する自己像は、20世紀後半を生きる作家のコスモポリタンな生活に即したものであり、シェイエットの言う “luftmensch” が表象するところの “imagined diasporas” を語る、あるいは “imagined diasporas” が語る可能性を探るというアプローチに繋がりがそうである。しかし、残念ながら、シェイエットのスパーク論 “Diaspora, ‘Race’ and Redemption: Muriel Spark and the Trauma of Africa” には、著者が2000年に刊行した *Muriel Spark* と比較して、より発展したと思われる点がほとんど見あたらない。確かに、“transformation”、“transfiguration”、“self-invention”、“multiple sense of self”、“performative” など昨今の研究でよく用いられるようになったキーワードが散りばめられているものの、その議論はスパークと彼女のフィクションに登場する主要なキャラクターやコンセプトを二項対立の図式に当てはめて論じ、最終的に初期の作家像に回帰するのである。

本論の最初に紹介したスパークと反ユダヤの修道院長とのエピソードについて、シェイエットは “That the paranoid anti-Semitism of the mother superior was merely a figment of a distorted imagination places her firmly on the side of Spark’s unreal mythomaniacs” (Cheyette, 2013, 131-32) と述べたうえで、スパークは修道院長に対抗するために「ユダヤ人である」必要があったと説明する。そして、“Spark had the freedom to choose to be a ‘Jew’ (not ‘part-Jew or any other sort of Jew’)” (Cheyette, 2013, 132) と続けているように、彼はスパークの宣言をナラティブ上の戦略と捉えている。しかし、スパークが何の議論の余地もなく「ユダヤ人である」と告げたのは、正統派ユダヤ教の排他的な定義や、その逆に定義など歯牙にもかけず虐殺を行うナチズムの両極端を知ったうえで、ただシンプルな真実として「ユダヤ人である」と宣言したのだと考えられる。⁴ とすれば、実のところ、ここにあるのはスパークを自分のナラティブに織り込もうとするシェイエットの戦略である。

シェイエットはスパークのカトリック改宗についても、“She converted from being a self-designated ‘Gentile Jewess’ and thereby attempted to contain and transcend an identity that was, in large part, conceived of in racial and victimized terms” と説明し、さらに “Spark chose the path of redemption rather than victimhood” (Cheyette, 2013, 132) と述べる。これらはすべて彼自身の解釈であり、“race”、“redemption”、“victimhood” などの語は彼自身が語ろうとするユダヤ民族の経験と歴史というコンテキストに結びつけて用いられ、それらがスパークによって使われているときにも自身の定義に当てはめて、独自の解釈を施すのである。彼によれば、スパークのカトリックへの改宗と詩人から小説家への「転向」について、多くの研究者がそれを何か有機的な調和、一貫性に向かう出来事と捉えている中で、Gauri Viswanathan は統一や調和を脅かす “anarchic potential” (Cheyette, 2013, 133) を持った二面性、多様性を指摘している、として評価する。そのような二面性 (多面性) に注目する立場から発展させようとするらしい彼の論は、例

えば、次のように強調する（以下の引用の出だしのフレーズと最後の文はそっくりそのまま前ページにも使われている）。

Spark's critics have tended to underestimate the extent to which her conversion not only unified a fragmented self, but also enabled her to occupy more than one space in her fiction in an extension, rather than a transcendence, of human messiness. Her faith in a universal higher authority, in other words, is thrown into disarray by a fictional practice that is plural and partial and embraces a multiple sense of self. (Cheyette, 2013, 137)

しかし、シェイエットの論考は、たった一頁、一段落の中でも次々と複数のテキストや人物を引き合いに出し、フィクションのキャラクターも実在の人物も同列に論じるので、きわめて理解が難しい。⁵ 明らかなことは、彼のスパーク論においては何らかの二面性・多面性、あるいは矛盾を抱えた主要キャラクターはほぼ例外なく、スパーク的人物、即ち“Gentile Jewesses”（あるいはその亜流）として分類される。シェイエットが見いだす“gentile Jewesses”の系譜は、スパーク同様“gentile Jewess”としての自分のアイデンティティを分析しようとする *The Mandelbaum Gate* (1965) のヒロイン Barbara Vaughan や *The Comforters* (1957) の Caroline Rose といった妥当な例から、*The Only Problem* (1984) の Harvey Gotham、*Aiding and Abetting* (2000) の Hildegard Wolf や Lord Lucan にまで及ぶ。さらに、自分の運命を意志によって書き換えようとするキャラクターは皆、スパークと結びつけられ、それらの人物たちがまともな「作者」か「エッセイ作者」かの判断基準は、詰まるところ、カトリック的なモラルの有無に帰されている（例えば、『幫助罪』におけるヒルデガルドによるセラピーでの語りには“God-like narrative authority”があり、一方、殺人が自分の“destiny”であると信じるルーカンは“a bad writer in both aesthetic and moral terms” [Cheyette, 2013, 157] であるとされ、そのコントラストが例に挙げられている）。

スパークにとっての“exile”の意味を考えるにあたって、よく見落とされがちだがあらためて考慮すべきは、シェイエットが想像するスパークの「想像上のディアスポラ」体験・過去ではなく、作家の変化や成長なのではないだろうか。

3 “I am what I am”

シェイエットは、それが語りの戦略上のことであるにしても、“Spark had the freedom to choose to be a ‘Jew’” (Cheyette, 2013, 132) と述べた。しかし、これは作家本人の理解とまったく相容れないものと思われる。そして、“conversion”についても、それはスパークにとって「転換」や「変化」ではなく、もともと自分がそうであったもの—“I am what I am”—の発見だったというのが作家本人の見方であろう。スパークは件の短編について“Note on My Story ‘The Gentile Jewesses’” (1963) により、あらためて説明を試みている。

I find it impossible to separate the Jewess within myself from the Gentile, even for the sake of argument. The attempt is absurd in any case if the two strains exist uncomplainingly amongst one's own bones. (“Note” 59)

多様な宗教観、聖書の解釈から語の定義、おまけに息子との確執まで、“gentile Jewess”としてのスパークをめぐる議論は複雑である。ただ、スパーク自身のスタンスにおいては明確と言ってよい。以下は、Philip Toynbee によるインタビューでスパークが述べたことである。

Alfred Kazin once said about me “She hasn't got a scrap of talent and she treats the Jews as if they were Eskimos.” I suppose he meant that I don't particularly associate myself with Jewish causes. But I defend them

sharply if they're attacked. (*Observer* 74)

これは事実である。例えば、*The Prime of Miss Jean Brodie* (1961) は、多くの読者と聴衆を楽しませると同時に、教え子たちの個としての存在を無視したエディンバラの女性教師やガールスカウトのリーダーと並べることでファシストを嘲笑する。それが明確なマニフェストであったことは“*The Desegregation of Art*” (1971) に明らかである。“Gentile Jewess”としてのスパークのスタンスは、女性としてのそれとも根本的に似ている。スパークはフェミニズムや女性のムーブメントとそれほど結びつけられてはこなかった(同世代の Doris Lessing などと比べてみれば、よくわかる)。しかし、ユダヤ人であり、非ユダヤ人であることと同様に、女性であることは彼女の存在と分かちがたい真実であり、多くの著作においても、女性であることをめぐる問題、その真実が鋭く描き出され、追求されているのである。

さて、『マンデルbaum・ゲイト』でエルサレムを訪れたバーバラは、現地のツアーガイドからいろいろな質問をされ、“gentile Jewess”である自分のアイデンティティに関して“I am what I am”というモーゼに対する神の答えを思う。そして、そこからさらなる自己分析、探求へと向かう。

She found no rest in mysterious truths like “I am who I am”; they were all right for deathbed definitions, when one's mental obligations were at an end. “I am who I am,” yes, ultimately, as a piece of music might be what it is; but then, one wants to analyze the thing. Meantime, she thought, the man wants to know who I am, that is, what category of person. I should explain to him the Gentile Jewish situation in the West . . . (*Mandelbaum Gate* 29)

バーバラの思索にはもちろん作者自身の思いや考えが反映されているが、エッセイにおいて自分自身の声で語るスパークは、いつものごとく、簡潔な答えを好む。

I had a strange conception of God, I thought him a charming and witty character with a ready answer, and with a lot of conflicting sides to his nature. I liked God, especially in his sophisticated moments, as when he spoke to Moses out of the burning bush, and Moses enquired his name, and God replied, “I am who I am.”

That was a good answer, it inspired personal awe as well as purely technical admiration.

Am I a Gentile? Am I a Jewess? Both and neither. What am I? I am what I am. (“Note” 60)

この答えにはもうひとつ、“I am what I write”という言葉もつけ加えられそうだが、スパークの“exile”ということについては、父親の死に際しての作家の言葉が手がかりになると思われる。故郷エディンバラで二度と暮らすことのなかったスパークのコスモポリタンな生き方とともに、家族、故郷、故国—と重層的な意味を持つ“home”との関わり、そしてあらためて女性の人生としてスパークの生涯を見ることで、見過ごされてきた“exile”の意味がもっと見えてきそうである。

引用文献

Carruthers, Gerard. “Muriel Spark as Catholic Novelist,” *The Edinburgh Companion to Muriel Spark*. Michael Gardiner and Willy Maley. Eds. Edinburgh: Edinburgh UP, 2010. 74-84.

Cheyette, Brian. *Diasporas of the Mind: Jewish and Postcolonial Writing and the Nightmare of History*. New Haven and London: Yale UP, 2013.

---. *Muriel Spark*. Tavistock, Devon: Northcote House Press, 2000.

Spark, Muriel. *Curriculum Vitae: Autobiography*. NY: Houghton Mifflin, 1992.

- . “Edinburgh-born,” *Critical Essays on Muriel Spark*. Joseph Hynes. Ed. NY: G.K.Hall, 1992. 21-23. [Reprinted from *New Statesman* 64. 10 August 1962. 180]
- . Interview with Emma Brockes. “The genteel assassin.” *Guardian*, Saturday Review, 27 May 2000, 6-7.
- . *The Golden Fleece: Essays*. Penelope Jardine. Ed. Manchester: Carcanet Press, 2014.
- . Interview with Sarah Frankel. “An Interview with Muriel Spark,” *Partisan Review* 54, Summer 1987, 443-57.
- . Interview with Philip Toynbee. “Interview with Muriel Spark,” *Observer* (colour supplement), 7 November 1971, 73-74.
- . Letter to Antonis Kotidis. 28/6/2003. Acc.12478 / Box 6. National Lib. of Scotland, Edinburgh.
- . *The Mandelbaum Gate*. (1965) London: Penguin, 1967.
- . “Note on My Story ‘The Gentile Jewesses’” (1963) in *The Golden Fleece*. 59-60.
- . Interview with Gillian Bowditch. “Still a Bright Spark,” *Sunday Times*, Ecosse, 16 September 2004, 1-2.
- Stannard, Martin. *Muriel Spark: The Biography*. London: Weidenfeld & Nicolson, 2009.

参考文献

- Spark, Muriel. *Aiding and Abetting*. London: Viking, 2000.
- . *The Comforters*. (1957) NY: New Directions, 1995.
- . “The Desegregation of Art.” The Annual Balshfield Foundation Address, *Proceedings of the American Academy of Arts and Letters*. NY: Spiral Press, 1971. 21-27.
- . “The Mystery of Job’s Suffering.” *Church of England Newspaper*, 15 April, 1955. 1.
- . *The Only Problem*. (1984) *The Novels of Muriel Spark: Volume 1*. NY: Haughton Mifflin, 1995. 293-419.
- . *The Prime of Miss Jean Brodie*. (1961) London: Penguin, 1965.
- . “The Religion of an Agnostic: A Sacramental View of the World in the Writings of Proust.” *Church of England Newspaper*, 27 November 1953, 1.

¹ “gentile Jewess”、“half Jew”、“exile”、“exiledom”などの語は、それらの定義をめぐる議論であることもあり、表記における便宜上、すべて英語のままとする。

² 拙著 *Muriel Spark’s Postmodernism* (Eihosha 2011) の Introduction に関する Notes の注12 (245-46) 参照。

³ スパークは、“exile”という語をめぐり、理由があつて故郷を追われることになった文人たち—Machiavelli, Solzhenitsyn, Shelley, Byron—の名を挙げ、当時から今にいたる、空間的な移動が持つ意味の変化などについて語っている。

⁴ スパークは2000年のインタビューで、彼女の息子ロビンと対立する血筋に関する問題について問われ、“The very strict Jews such as those at the Jewish Chronicle refuse the word half-Jew altogether, which is, of course in the dictionary. One knows what half-Jews means. Hitler didn’t care one damn what the Jews’ definition was”と述べると同時に、次のように付け加える。“They say there is no such thing as a half-Jew and I say there is, because I experienced it.” (*Guardian* 7)

⁵ スパークは知人の Antonis Kotidis に宛てた手紙において、シェイエットの本について次のように述べている。“You mention Cheyette’s book on me. No one I know can understand it, least of all myself. He is a committed Freudian who thinks authors can be analysed through all their fictional characters. By this reckoning Agatha Christie is both a private detective and a serial killer.” (28 June 2003. Acc.12478 / Box 6. National Lib. of Scotland, Edinburgh)

